

Ⅲ. 「基礎」とは何か —— その諸矛盾

「基礎」という言葉はもちろん技能や訓練上の問題を表現するためにだけある言葉ではない。極めて幅広く用いられ、したがってまた非常に普遍的な意味を持った言葉である。建物の「基礎」から「基礎」資料、はては「基礎」化粧品まで、われわれの生活の殆んどあらゆる部面で「基礎」という言葉に出会い、「基礎」という発想が出てくる。多少なりとも複雑な事物を前にした時に、その事物を支えているようなある種の「大事なもの」を言い表わす便利な言葉である。非常に一般化しているので「基礎」とはどういうことかなどといちいち考えない程常識的な言葉なのである。それだけに「基礎」という発想がどういうものであるのか、その特徴を問題にすることは容易なことではない。しかし、現に公共向上訓練に対して求められる技能の「何か」が「基礎」という発想で見られているのだ。そして、同じ物も測定器の種類が違えば測られた答えも違うように、見方が見えるものを規定するということもまたわれわれのよく経験するところである。「基礎」という見方（ないし発想）の検討は避けて通ることができない。

以上のような意味で「基礎」ということを検討するが、議論が様々に迂回したりある程度抽象的になったりするのは事柄の性質上やむをえない。しかし、検討の目的をはっきりさせ読みやすくするために、公共向上訓練で「基礎」をとりあげようとした時に具体的にどのような形で困難あるいは混乱が現われてくるのか、若干の基本的な例をあげておこう。

まず第1は「基礎」の範囲とでも言うべき問題である。技能（あるいは熟練）は1人ひとりの作業者の身についたものであって、1人の人間をばらばらにできないのと同じように、ばらばらにはできないという面があるが、同時に、様々な作業的、知識的な諸要素から成り立っているとも見られる。とりわけ教育訓練の実際的立場からは、一挙にすべてを教え、学ぶことはできないのだから、とりあげていく課題はひとつひとつ限定され結果的に熟練者の技能は分解して考えられざるをえない。そこで向上訓練の内容を「基礎」ということで作ろうとする場合にも、当然、様々な作業上のまた知識（理論）上の諸課題を組まな

ければならない。そこに「基礎」はどのような作業的、知識的課題（要素）をカバーすれば良いのかという諸要素の範囲の問題が出てくる。この問題は経験を積んだ指導員の間でも簡単に意見の一致するところではない。これは向上訓練のコース内容に限らず、熟練した技能を全体と見て、それを支える「基礎」⁽¹⁾になっている部分を取り出そうとする時にはいつも現われてくる困難である。

第1の例が「基礎」技能の範囲あるいは外延的な広がりの問題だとすれば、第2の例として「基礎」を問題にする際の内包的な諸困難をあげることができるだろう。仮りに何らかの基準をもってある技能の「基礎」となる諸要素を確定し、向上訓練の内容に盛り込んだとしよう。第1の問題は一応処理されている。だが、こうして技能を支えている様々な要素（その中には手作業的なものも知的なものもある）が一旦確定されると、今度はそれらひとつひとつの課題についてそのまた「基礎」が問題になりうる。よく聞かれる単純な例としては、OJTの中で例えば「基本的な作業を教えようにも分数計算ができない」というような嘆きがいくらもあるし、同じことは公共の養成訓練でも問題になる。公共向上訓練の場合には、この種の問題は「計算」というようなレベルの問題としてはあまり聞かれないとしても、同じ「機械職場経験3年」という人でも自動機のボタン押しの仕事をしてきた人もいるなど、受講生が既に身につけているものの多様さ、レベルの差が大きいといった条件からすれば、さらに複雑困難な問題だとも言える。

この第2の「基礎」の内包的問題は教える指導員の側の問題としても現われてくる。技能の「基礎」をなしている要素としてとりあげられた同一の課題でも指導員によって意味づけ、力点の置き方といったところで差があるということである。これは実践的には決して瑣末な問題ではないし、「基礎」をめぐる理論的な問題でもある。「基礎」の内包的問題とは、要するに、技能の「基礎」とは、その分解された作業的要素や知識的要素を確定するだけでは押え切れないのではないかという問題である。

第3に、「基礎」の第1、第2のむずかしさと絡み合って、今日の訓練現場に広く共通しているように思われるある種のとまどいがあげられる。それは養成訓練における「基礎」と向上訓練における「基礎」の関係の問題である。そ

れは同じなのか違うのか、違ふとすればどういう点で違ふのか。公共向上訓練はこの点も実際的に対応する中で次第に向上訓練らしい姿を作り上げてきているように見えるが、自覚的意識的には明確でないところではないだろうか。一方には、向上訓練は本来「基礎」ではなくてもっと「高度な」訓練であるべきなんだがという考え方もあり、他方では、向上訓練のような短期間では反復訓練も十分にできないのだから所詮知識の切り売りの講習会の域を出ないのではないかというようなイメージが残っている実情も否定できない。「向上訓練は養成訓練にも比肩しうる教育的意味を持っているのか？」。

これらの問題を解きほぐしていくことは、公共向上訓練の実践の上でも重要な意味を持つだろう。以下の「基礎」の検討は、これらの問題に直接の具体的な回答を与えないまでも、そこでぶつかっている諸問題を展開し整理していくことを目標にしよう。

1. 「基礎」は“部分”である

いろいろな事物について用いられる「基礎」という言葉の第一の特徴はその一般性、抽象性にあるように思われるが、その抽象的な意味はどんな特徴を持っているのだろうか。まずこの点を詳しく調べて確認しておこう。

「基礎」は先にあげた建物の「基礎」、 「基礎化粧品」などの他に、例えば「基礎学科」「基礎知識」「基礎理論」とか、われわれが直接問題にしなれない「基礎技能」「基礎学力」などと使われるが、このうち建物の「基礎」以外は「基礎になっている」あるいは「基礎的な」という形容語が「化粧品」「学科」等々の名詞と結合してできた言葉であり、その「基礎」自体が何か特定の事物を指しているのではない。また、「発展の基礎を築く」とか「基礎からたたき上げる」というように単独に「基礎」という名詞が使われる場合にも、それはやはりいろいろな物事に当てはまる抽象的なものを指している。その意味では「基礎」という語がある特定の具体的な物の名称になっている例を私は建物の「基礎」以外に知らない。たいていの国語辞典も「基礎」の意味をこの建築における「基礎」と抽象的一般的な「基礎」とに分けて記している。

一般には建物の「基礎」とほぼ同じ意味に解されている言葉に「土台」があるが、⁽²⁾これも「基礎」ほど一般的ではないが物事の基本といった意味で使われる場合がある。「基礎」という言葉ももともと建物の「基礎」として使われていたのが、抽象的な意味に広がり、様々な事物について用いられるようになったのだろうか。どうもそうではないらしい。「基礎」はもともと今日広く使われているような抽象的な意味を担って生まれてきた言葉であり、それが建築の方では具体物の名前として定着したもののようである。⁽³⁾

「基礎」という言葉の最も古い用例として『日本国語大辞典』〔26〕は「その自主の基礎（キソく注）ドダキ）は、人民の性行の上に在なり」という『西国立志編』〔27〕の文章を掲げている。『西国立志編』は明治3年から7年にかけて出された中村正直の翻訳書で、当該文章はその第一編に出てくる。⁽⁴⁾古語辞典の類を見ても「基礎」という言葉は見当らず、また初期の英和辞典、英華辞典にも「基礎」は見当らない。⁽⁵⁾しかし〔26〕の掲げている用例のひとつ国木田独歩の「暴風」は明治40年の新聞連載小説であるので、遅くとも明治末年にはすでに一般的な言葉となっていたものと思われる。⁽⁶⁾詳細な考証は省くが、これらの事実を照らしてみると「基礎」という言葉も明治の近代化の中で生まれた多数の翻訳造語のひとつであることは間違いないと言える。

〔27〕の用例からもわかるように、「基礎」という言葉はその作られた当初から今日のような一般的抽象的な意味を持っていた。しかし、それ以前に「基礎」に類する日本語がなかったのかといえば必ずしもそうではない。「もと」「もととい（基）」なり「よりどころ」なりの言葉は古くから抽象的な意味でも使われてきたし、「土台」という言葉が抽象的な意味に拡大されて用いられても良さそうなものである。そうならなかったのは当時ヨーロッパ近代思想の啓蒙が危急の事態であった中で数多くの翻訳造語が生まれたのと同じ事情にあるのだろう。⁽⁷⁾

それでは「基礎」という造語を当てなければならなかったある抽象的な意味は既存の和語の意味していたところとどれ位違っていたのだろうか。代表的な類義語であり、また日本語の基礎語でもある「もと」と比較してそれを考えてみよう。『岩波古語辞典』〔29〕は名詞「もと」の語源・語義に次のような説明

を与えている。「《草木の株・根本が原義。古くは『うら(末)』『すゑ(末)』の対。立っているものが地面や床に接する所の意に広がり、人の本拠地とする所、居所、根本、基礎などの意に発展。時間に転じて、本来、昔、以前などの意》」⁽⁹⁾。これを見るとさまざまな意味での上部あるいは全体を支えているという点では「もと」は今日の一般的な「基礎」の意味と変わりはないように思われる。しかし、この説明だけからでも注意して考えてみるとある特徴的な相違を指摘することができる。「もと」とは「末」の対である。「もと」は「立っているものが地面や床に接する所」であり、「末」とは「先。端。」である。つまり、「もと」は立っているものを支えている所を指すのだが、それはいわば支点（接点）を指し示している。だからその反対の極には「末」があるのだ。したがって、言いかえると、「もと」は立っている全体の支えている接点の方向に関心があって、上部に向かって、あるいは「末」の方向に向かってどこまでが「もと」なのかには全く関心がない。ここが「基礎」との決定的な発想のちがいである。「基礎」もやはり最も下の所において上部を支えているのだが、それは必ずあるまとまりをもった部分である。「基礎」の対は「応用」であったり「専門」であったりするが、例えば「基礎」と「応用」で全体は二分されて埋め尽されるのであって、その間にどちらでもない第三のものは入らない。

このような「もと」との比較によって浮かび上がってくる「基礎」の「まとまりをもった部分」という性格は、「基礎」という発想に慣れているわれわれにとっては当然のあるいは暗黙の前提であって、とりたてて問題にされることは少ない。しかし、「基礎」という見方のそのような性格は「基礎技能」を考える時にも重要な影響を及ぼす特徴的な性格である。ちなみに現代の国語辞典では、こうした「基礎」という語の性格を充分浮かび上がらせる説明を与えているものは稀である。数ある辞書の中で『新明解国語辞典』〔23〕が次の説明を与えていて注目される。「その上に複雑（高等）な何物かが構築される土台となる部分」⁽¹⁰⁾。

それでは「基礎」が単に「下支えとなっている」というだけでなく、そういう「部分」だということからどのような結果が生ずるのか、「基礎技能」研究の上で踏まえておかねばならないと思われる主な点を展開しておこう。まず第

一に、「基礎」と「全体」あるいは「応用」などとの関係の問題である。「基礎」はあるまとまりを持った部分であるから「応用」ではないある独立性を持っていると同時に「全体」や「応用」と切り離しては成り立たない（独立でない）という矛盾した関係を持っているものである。先の図(1)の建築物の「基礎」についてこれを考えてみよう。まず、ここでは「基礎」とは布基礎等の部分、具体物である。しかし、それが「基礎」であるのは屋根までも含む上部の構造を支えているからに他ならない。それがかの部分が「基礎」と呼ばれる所以である。すなわち、布基礎はその機能から見れば屋根など非「基礎」の部分にまで及んでいるものである。建築物の「基礎」あるいは「基礎化粧品」のような物体の場合には、このように「基礎」と呼ばれる存在物とその機能とを分けて考えることに不都合はないように見えるし、そのことによって先に述べた基礎と全体との間の矛盾した関係も表面に現われてこない。しかし、これが抽象的なものについて言われている「基礎」である場合にはそうはいかない。ひとこと言えば、「基礎」の基礎たる所以、全体を支えているという機能と「基礎」という存在とは区別されてあるわけではないということである。「基礎技能」について考えてみよう。「基礎技能」が支えるべく前提されている全体あるいは応用とは、何らかの意味で複雑な作業能力である。ある作業能力を複雑な構造的なものに見なしているからこそ、その「基礎」となっている能力、「基礎技能」が問題にされるのである。例えば、機械加工の生産技能をとりあげてみると、その「基礎」として、図面を読むこと、測定、工作機械を操作して加工すること等々についてそれぞれ基本的な作業能力が取り出されるだろう。しかし、このようにして取り出される「基礎技能」はどれをとっても熟練した機械加工技能の中に独立した形で、部分として存在しているわけではない。図面を読むことにせよ、測定にせよ、熟練した技能としてそこにあるのは全体としての、そう言いたければ「応用的な」作業をこなす能力に他ならない。次のように言っても良い。技能者は、基礎的な技能と応用的な技能を分けて持っているのでもないし、作業者はそれらを分けて発揮しているのでもない⁽¹⁾。だからある複雑な作業能力を前にして、それを支えている「基礎技能」と言う時には、それは抽象的なものなのである。

以上のことは「基礎技能」のとらえどころのなさの重要な要因となっている。建築物の「基礎」がその全体構造の中にあっても指さして示すことのできるものであることは対称的な「基礎技能」の困難さである。だが、現にひとびとは諸技能を複雑な構造的なものとしているのだし、「それを支えているもの」として「基礎技能」を問題にしてきているのだ。問題は答えとともに与えられる。ひとびとはちょうど建築物のかの部分を「基礎」と呼ぶように、何らかの具体的なものに託してこの抽象的な「基礎技能」を固定し、抽象的な「基礎技能」に具体的な姿を与え、そのことによって困難を実際的に処理している。複雑な作業はより単純な基本的な作業要素に分解され、「基礎技能」は最初の複雑な作業とは別のより単純な要素作業をこなす能力に還元してとらえられる。これによって「基礎技能」はその「基礎」という発想の要求するとうり独自の形を持つことができる。こうしてはじめて「基礎技能」の向上訓練が（それどころ Off JT 一般が）実行できているのだとも言える。しかし、実際的処理は問題そのものの解決ではない。この実際的処理（それは誰でも行なっているのだが）の代償は、問題であったはずの「ある技能を支えている基礎技能」をそれに独自のすがた形を与えた諸作業ととり違えるという形で現われる。かくして「基礎技能」自身が独立のものに見なされ、しばしばそのように扱われる。「基礎技能」の「基礎」たる所以は全体または応用的な何らかの技能を「支えている」というところにあったはずであるのに。

このような事情から「基礎技能」が独立の対象として立てられる時には次のような問題が必ず起ってくる。まず第一に、どのような基準で取り出したものにせよある要素的な作業を行う能力として立てられた「基礎技能」は、それ自体をいくら検討してみても「基礎」たる性格を見出すことは決してできない。なぜそれが「基礎技能」と言えるのかの答えはそこにはないからである。では、どこにあるのか。それは「基礎技能」として立てられたものにあるのではなくて、「基礎技能」が独立の姿を持っていないところ、すなわち「複雑な」「応用的な」ある技能の中にしかない。「基礎」は「応用」を解明するために立てられた筈であった。だが「基礎」の説明は「応用」に求められる。これは永久に解けない円環である。

第二に、立てられた「基礎技能」は自らの「基礎」を要求する。ある技能を支えるものとして「基礎技能」の「基礎技能」たる所以はあった筈であるのに、それが立てられたとたんに、つまり独立の対象となったとたんに、支えられるもの、「基礎」でないものに変化してしまうからである（無限背進）。

これらのことは“部分”としてとらえられる「基礎」が必然的に生み出す解き難い困難である。

2. 「基礎」は“原理”である

「基礎」が部分であることに注目しながら「基礎技能」を考える時のむずかしさを描き出した。このむずかしさは本源的なものであって、それ自身解消することのできないものである。したがって、誰でもこの「部分」として見る見方をもう一方の別の見方でカバーすることになる。つまり、ひとびとは「基礎」を部分と見ると同時に「原理」と見ている。「原理」はすべてを貫いているものであるのだから「部分」という見方とは相矛盾するところが大きいはずであるが、「基礎」と「原理」が強く結びつけられているのは一般的な事実であろう。

「基礎技能」について見てみよう。前章で紹介した生産現場からの様々な発言の中から拾ってみると、「…経験者が…理論的な背景をもつことによって…」
「“その作業の裏づけ”」「理論的にこうなんだという裏づけを教えてほしい」
「やはり、原理的なものは基礎知識として持つべきで…」
「自動機は汎用機の原理の上に成り立っているので…」等々である。また、今回聞き取りに廻った企業の話の中でも、「われわれ（生産）現場の人間は原理的に教えるというのはあまり得意ではない」というような卒直な発言がいくつも聞かれたが、確かにそこは逆に公共職業訓練の得手とするところではあるだろう。さらには科学技術の長足の進歩と産業の諸部門への普及が技能労働者にますます科学的技術的知識を要求するようになってきているという事情もある。

したがって公共向上訓練においてもそこに求められている「基礎」を原理的、理論的なものとして見る見方は極めて有力なものと言えよう。例えば、本章の

はじめに「基礎」の内包的問題として例示した問題、ある技能の作業的要素や知識的要素を確定するだけでは「基礎技能」は押え切れないのではないかという疑問にも、「基礎」を原理的、理論的なものとして見る見方は明確な解答を与えるかのように見える。つまり、様々な要素的な作業そのものではなくてそれらの中にある普遍的な原理をとりあげることが重要なのであり、諸知識ではなくて科学的あるいは理論的な知識が「基礎」と言うに足るものだというように。

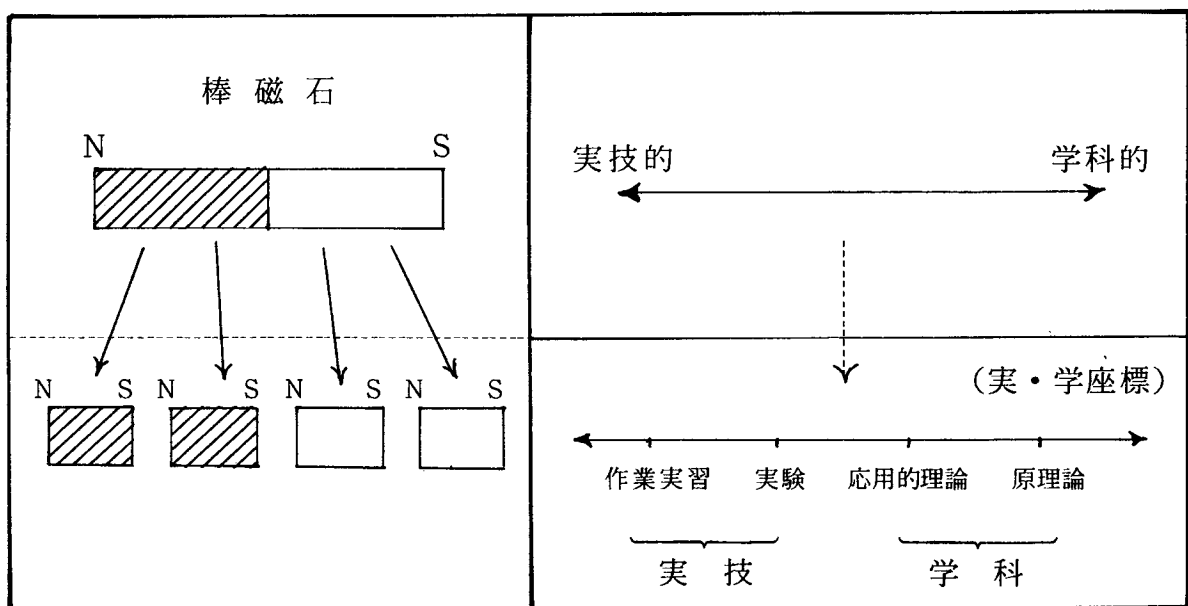
しかし、それでは「基礎的なもの」が求められている公共向上訓練は要するに原理的、理論的な教育訓練をすることだ、と言って良いのだろうか。このように言い切ることに対しては、生産現場からもまた公共向上訓練の側からも異論があるに違いない。いろいろ言い方があるだろう。「原理だ理論だと言っても“知育偏重”みたいなものではしょうがない」とか、「実際的な作業の中に生かされないような基礎教育ではこまる」とか、「公共向上訓練は集中的に行なうといっても短期間のものだ。養成訓練の学科のように一から順々に説いていくわけにもいかないのだから、原理を教えるといっても中途半端なものにしかなるまい」とか、「若年者ばかりではないのだから、原理、理論の学習は非常に困難だ」等々、いろいろな角度から問題が指摘されるに違いない。技能の「基礎」を原理、理論ととらえることはやはり割り切れない矛盾を孕んでいるということなのである。

この点をもう少し深く考えてみよう。とは言うものの、上に今引き出した問題は、結局のところ職業教育・訓練のうえでは“実技と学科”の関わりの問題として考えられてきた古くて新しい難問に帰着する。公共向上訓練は、現役の「作業[●]者[●]」の訓練であることによって、とりわけそこに「基礎的なもの」が求められている点に注目する時に（ここでは「基礎＝原理」という観点をとりあげているのだから）、改めてその古くて新しい問題を鋭く突き出しているということに他ならない。したがって、この問題に対する実際的な回答あるいは処理は“実学一体（または融合）”の様々な試みや仮説や解釈として存在している⁽¹²⁾し、現実の公共向上訓練の中でも自覚的にまた無自覚的にも対応がとられ模索試行が積み重ねられている。ここで考えようとしていることはそれらの回答や試みにもうひとつ新たなものを追加しようというのではない。“実学一体”

がなぜ問題になるのか，“実技と学科”という問題の立て方がそもそもどういう性格のものであるのかということを考えておきたいのである。それは職業訓練の経験に即して「基礎—原理」という問題を考えることになるろう。

“実学一体”がなぜ問題になるのか。極めて単純に次のように答えることができる。“実・学”はもともと“一体”であり、同時に分離しているからである。具体的に言おう。なぜもともと一体なのか。学習者が1人の人間として一なるものだからである。技能者、熟練者が一なるものだからである。その限りでだけ“実学一体”は問題になり得る。ある実技的なもの（手工的熟練でも良い）と学制的なもの（理論的知識でも良い）とが別々の人間によって習得され、あるいは作業される（分業）のであれば、その実技と学科の一体など最初から問題にされない。その実技的なものと学制的なものとは分離できず、したがってまた別々の人間によって担うこともできないという前提のもとにのみ“実学一体”は問題になる。だから“実・学”がもともと“一体”であるから、またその限りでのみ“実学一体”が問題にされるのだと言うのである。では実技と学科の分離はどうか。これは事実としての説明は殆んど不要だろう。分離していなければ「実技と学科」と並べることもできないし、両者の“一体”など問題になるわけもない。

表2) 磁石の分割と実・学の分割



以上の事態を磁石の例を作ってもっとはつきりさせておこう。ある実技的なものと学制的なものが一体だという状態は表(2)の磁石を使って説明できる。磁石は相対するN極とS極から成っているがこれは一体のものである。他方、訓練の実際の遂行上の枠組み、カリキュラムのレベル、あるいはその時のわれわれの常識的な考え方といった点から言うと、表(2)のいわば“実・学座標”とも言うべきものが想定される。実技と学科に分けられる。それぞれがまた作業実習と実験とか、応用的理論と原理論とかに分けて考えられ、またそのように実行されているかも知れない。この限りでは、作業実習とは実験ではないもの、実技とは学科でないものというようにそれぞれを特定して区別している。その上で「一体」とか「融合」とかが考えられ、試みられている。だから作業と実験の間、実験と応用的理論の間、応用的理論と原理論の間には、いくらでも中間的な諸形態がありうるし、また必然的に生み出されてくる。

すなわち、ある訓練コース全体をひとつの有機的な事柄と見る時、あるいは1人の受講生の中に結晶するものとして見る時には、先の磁石の両極のように“実・学”は一体的なものでしかありえない。しかし、それは現実の訓練の遂行上は、必ず、区別され分割されながら実現しているということである。そこで磁石の分割を考えてみよう。磁石をふたつに割ってももっぱら「N極」である性質のものともっぱら「S極」である性質のものに分かれるわけではない。磁石はどんな細かな細片に分割した状態（分子磁石）でもN極とS極を持っている。これと良く似たことが“実・学座標”の上に配列したような実技、学科のそれぞれについても言える。一見“純粹”に手作業であるような、よく「身体でおぼえるしかない」などと言われるような作業であろうとも、およそ何の知的なもの（厳密には精神的なもの）にも支えられていないなどということはいえないし、逆に、最も原理的と思われるような“純粹”理論的活動であっても「紙と鉛筆」なしで、文字や数字、言葉の習熟を伴なわないで成り立つというような神がかり的なものではありえない。だからわれわれは実技の中に学制的なものを取り上げ、学科の中に実技的なものを問題にする十分な根拠を持っている筈だし、現実の訓練の中で作業や原理に取り組んでいる時にはそのように考えて行動している場合も多い。にもかかわらず、同時に、それぞれを切

り離して考えないわけにもいかないのだ。⁽¹³⁾「実・学一体」を実現しようとする時のむずかしさ、および、公共向上訓練に求められている「基礎」を「原理的なもの」ととらえることが一面では承認され、一面では反対されるという事態の本質的な姿は以上のとおりである。このように「基礎＝原理」と見ることにその見方自体に根ざした必然的な困難が伴っている。

3. 「基礎」は“構築”される

「基礎」は「部分」であり、また「原理」であること、同時に、その故に必然的な困難と混乱をも生み出すものであることを描いてきた。これらのことと深い関わりを持ち、これらをひとつにまとめたような「基礎」の特徴に「構築されるものである」ということがある。建築物しかり、会社組織しかり、学問しかり、「構築される」つまり人間が作り上げるものである。「基礎」ということは、そういう「構築される（人間が作り上げる）」ものについて言われるのであって、植物や動物、その他自然物についてはあまり「基礎」という見方はされない。

人間の「構築物」について言われるが故に、「基礎」というものは、ある重大な難問題を誰にもわかる鮮明な形で露わにする。それは何かといえば、「土台」であると同時に「はじめ」だということである。建築物の基礎を見れば良い。それは構築物の土台となっており、同時に構築の最初に手がけられる⁽¹⁴⁾。技能形成のような「構築」の場合にも、「基礎」は形成された複雑な熟練技能を支える土台となっているものと考えられると同時に、技能形成の最初の方で、つまり応用的なものに進む前に身につけるべきものと考えられてもいる。後者の「基礎」は「初歩」⁽¹⁵⁾とも言う。

「土台」であると同時に「はじめ」だということがなぜ難問題なのか。それは建築物と技能の場合ではいわばちょうど正反対の現われ方をする。建築物の場合には「土台（正確には基礎）」が「はじめ」に工事されねばならないこと、「土台」と「はじめ」の一致は自明のことである。屋根から作り始めることはできない。したがって難問は家ができたあとで「基礎」を強固なものにと

りかえることができないとか、屋根を作っている時に「基礎」を手直ししたりはできないという形で現われる。「基礎」の良し悪しは「基礎」工事で決まる。ところが技能の場合には、「公共向上訓練に基礎が求められている」というのが事実としてある。つまり、でき上がった構築物の「土台」を改修したり、すげ変えたりできるというのである。したがって、こちらでは難問は逆に「土台」と「はじめ」の不一致として現われる。具体的に言えば「養成訓練で問題になる“基礎”と向上訓練で問題になる“基礎”とは違うものなのだろうか」ということである。これは「違う」とも言えるし、「違わない」とも言える。誠に難問である。

違わない。養成訓練の中で学ぶような「基礎」的な諸作業、諸知識は、そのまま熟練者の仕事の中に生きている。例えば、ここに『ガラス施工』[37]という養成訓練用教科書がある。そこには各種の切断、取り付け、運搬から工事中のガラスの保護、清掃まで、また図面や現場状況からの作業内容の読み取りから積算、施工計画にいたる「ガラス施工」という職業の基礎的な要素が網羅されている。それでは生産現場で熟練者が作業する場合、それはわれわれは普通「応用的」とか「ベテラン」の仕事とか考えるが、そこではこの『ガラス施工』の教科書で取り上げている以外の、別のことをしているのかということも言えない。この教科書で「基礎」として取り上げている様々な事柄のいずれかを行なっているに過ぎない。そのような意味からか、この『ガラス施工』という教科書を作成した担当者は「これに続く『応用編』というのを作ることはあまり意味がない」と答えている。

「はじめ」としての「基礎」は「応用」なり「熟達した状態」の中に絶えず繰り返し現われる。だから向上訓練で問題になる「基礎」は養成訓練で問題になる「基礎」と違わないのである。この点を強調してある先達も次のように証言しているくらいだからそれは昔から知られていることなのであろう。“稽古とは一より習ひ十を知り十より帰るもとのその一”⁽¹⁷⁾。

だが同時に、違う。養成訓練で取り上げられるような「基礎」に対して、向上訓練に求められる「基礎」は網羅的でなく量的に限定されているというだけでなく、一見同じ「基礎的な」事柄であってもその“意味”が違ってくる。未經

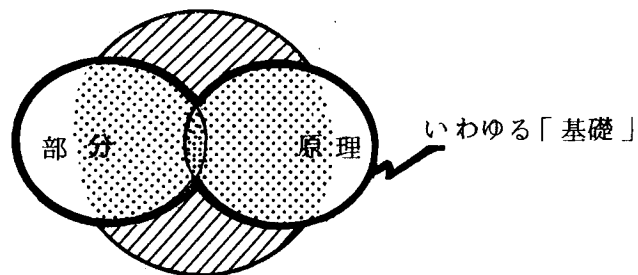
験者あるいは初学者にとっての「基礎」の意味と、経験を積み、技能、知識を蓄えた人にとっての「基礎」の意味とでは違いがある。また、「基礎」の意味内容が違って来るだけでなく、それを取り上げる時の形式（題材、課題）も違いうる。未経験者にとっては「基礎」をわかりにくくしてしまうような、“現場的な”あるいは“実作業に即した”題材で取り上げた方が、経験者にとっては「基礎」の意味が良くわかるということもある。だから養成訓練と向上訓練とでは課題や教材に自ずと違いが現われても来る。

どちらもそれなりに真実であり、教訓的ではある。しかし、「違う」と同時に「違わない」などというのは合理的とは思われないから、これを整合的に説明しようという試みはいくらでも生まれてくる。「らせん的發展」「主体的基礎と客観的基礎」等々⁽¹⁸⁾。しかし、問題は消えないであろう。——「基礎」とは何か。

われわれもこうして「はじめ」の問題に戻った⁽¹⁹⁾。「基礎」とは何か。しかしわれわれはただふり出しに戻っただけではない。少なくとも「基礎とは何か」という問題の困難さ、その根本的な性格について考えてきた。どういうことが結論的に言えるのかまとめておこう。

第一に、「基礎とは何か」のむずかしさは「基礎」という発想そのものの中に含まれている。そのことをわれわれは「基礎」に定義を与えるのではなく、「基礎」ということで一般に考えられていることをすべて受け入れ、そうした様々な「基礎」がいずれも割り切れないものであることを描くことによって証明した。

図3 「基礎の図式」



したがって第二に、「基礎」という発想の困難を言ったからといって、それを否定し、捨て去ろうということではない。そんな提言は無意味なことだし、そもそもわれわれ自身が「すべて受け入れ」ているのだから。われわれが考えてきたことの成果は別のところにある。それは、われわれが「基礎」という名で呼んでそれとは知らず求めているものは、「下支えになっている部分」という側面からも「原理」という側面からもとらえ切れないもの、言うなれば様々な「基礎」から“ズレた”ものであることを知った点にある。乱暴な試みだがこれを図示すると図3のようになる。

この「ズレ」の存在をもう少し明確に意識しながら「基礎的なもの」を考えるためには角度を変えて問題を取り上げてみなければならない。それはV章で行なう。だが、その準備として次章で「技能」について考えてみよう。

Ⅲ への注

- (1) 能開訓練の改善を目的とした訓練適応性検査の研究が職業訓練研究センターで行なわれているが、その検査項目の設定という点でも技能の基本的な要素が何か問題となっている。
(七尾, 他 [34], P. 33)
- (2) 建築学の方面では、一般の木造建築について「基礎」と「土台」とは別の部分を指す名称として使われている。次ページ図1のとうり「土台」は壁の最下部にあたり、「基礎」はそれを含む上部構造全体と加工した地面（地業）との間にあって、上部を支えている構造物のことである。ちなみに、ここでも「基礎」という言葉が「基礎構造」と抽象的な意味で使われ、その時は、今言った「基礎」と地業の両方を含むものとして考えられている。
- (3) 木造建築における布基礎構造は比較的新しいものである。建設省住宅局が1950年に行なった「都市住宅調査」によれば、布基礎使用のものは45%であり、「土台」の下には「玉石」が置かれているものの方が50%で多数であった。布基礎使用は1950年制定の建築基準法規によって強制化された。ある研究によれば、一般住宅への布基礎の普及は大正中期、コンクリート布基礎の普及は昭和初期とのことであり（〔25〕P.109）、それ以前の一般住宅では旧来の玉石による基礎構造が殆んどだったようである。旧来の建築における名称は図2のとおりであるが、これが雨水等による土台の腐植また耐震性などの理由から改良されて今日の布基礎構造になったのである。建築における「基礎」という名称の定着は建築思想の近代化の上でも興味深い事実である。壁の最下部が土台と呼ばれていることから、旧来は恐らく「玉石」「礎石」は大地の加工に属するものと見なされており、それが建造物の一部、独立の部分に転化してくる変化は建築物の見方の変化を特徴づけるものではないだろうか。

図1 建物の「基礎」と土台

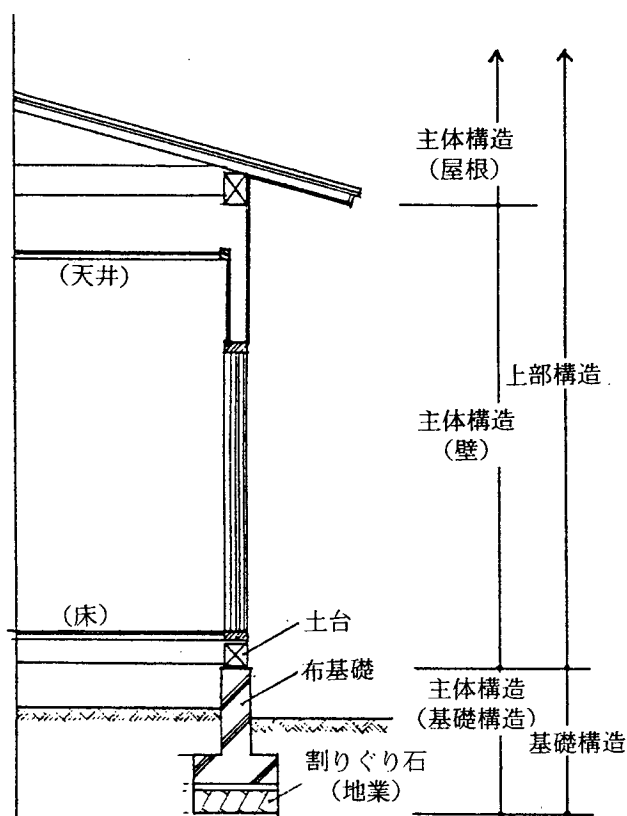
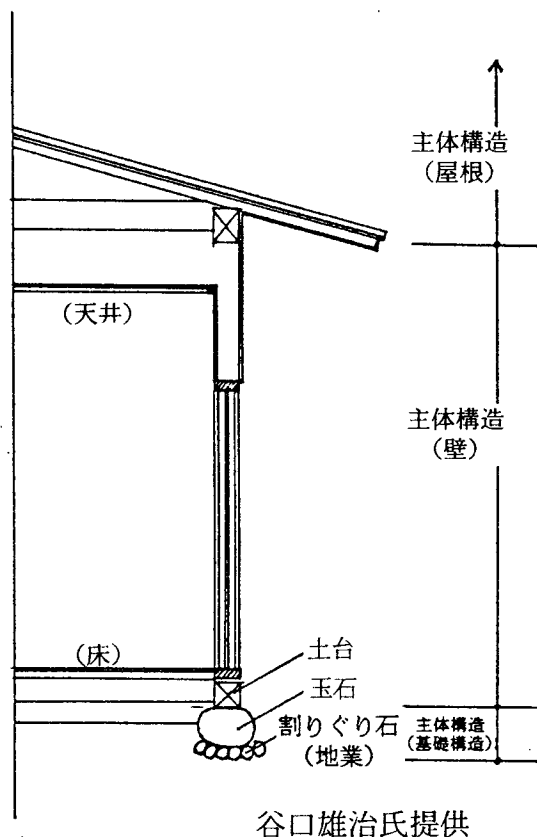


図2 旧来の建物の土台



- (4) 原著作はSAMUEL SMILES“SELF HELP”(1859 ロンドン)である。当該文章の原文は“The solid foundations of liberty must rest upon individual character;…”である。
- (5) 「上代(奈良時代)から近世(江戸時代は前半期を主とする)に至る、日本の古典にあらわれる主要な語彙を収めた」とする『岩波古語辞典』[29]になく、講談社『江戸語大辞典』にもない。また、1875年ロンドンで出されたERNEST MASON SATOWとISHIBASHI MASAKATAによる英和辞典では、“foundation”の項は、“(of a house) dodai, (basis) yoridokoro”, “basis”の項は、“moto, dodai,yoridokoro”となっている。1886年のJ.C.ヘボン『和英・英和語林集成(第三版)』になると、和英に“Kiso キソ基礎 n Foundation;basis:- wo katakushite hajimeru.”とあり、英和では、“Foundation, Do dai,ishizue, motoi, yoridokoro,kiso.” “Basis, Motoi,ne,dodai,ishizue,kiso.”とある。
- (6) 「暴風」からとられた用例は「小作米が今村一家の生活費の基礎(キソ)を成して居る」
(〔26〕)
- (7) 「基礎」という語自体は扱っていないが、こうした翻訳語問題については、柳父章の一連の著作〔30〕〔31〕〔32〕〔33〕が参考になる。
- (8) どの国語辞典を見ても「もと」は「基礎」の説明に必ず使われる言葉である。

- (9) ここで「基礎などの意に発展」と述べているが、この概説に続く、意味別の語釈には、「基礎」の意は登場しない。(現代語の中では、「基礎」と言うべきところを「もと」という場合がないではないが、古語「もと」の意味としては、「基礎」を含めるのは行きすぎではないか)
- (10) 殆どどの辞書が建築上の名称としての「基礎」と抽象的「基礎」とを並置してそれぞれに類義語を並べてある域を出ておらず、「基礎」の概念的説明を与えていない。例えば、「⊖〔たてものの〕土台。いしずえ。「～工事」 ⊖何かをしたり考えたりするもとになるもの。「一教育、一知識」(三省堂『国語辞典』)、「①いしずえ。土台。②物事のもとい。根底。「一を固める」(角川『国語辞典』)、「土台。④建設物の一番下にすえ、全重量をささえるもの。⑤物事を成り立たせるおおもと。「科学の一づけをする」(岩波『国語辞典』)、「①土台。いしずえ a foundation ②もとい、根底 the basis」(旺文社『国語総合辞典』)。『広辞苑』は、「①その上に建物を建てたり大きな装置をしたりするためにすえる土台。いしずえ。②それを前提として事物全体が成り立つような、もとい。「一理論」③建築に先立って地面をならし固めること。地形(じぎょう)。「一工事」)と三つに分けているが、③は疑問。

〔23〕の説明に含まれる「複雑(高等)な」「何物か」「構築される」「土台」「部分」等の要素は、「基礎」概念の理解に不可欠のものである。

- (11) ここで、技能を「持っている」人を「技能者」と言い、技能を「発揮している」人を「作業者」と主語を書き分けたが、その意味は、Ⅳ章で展開される。
- (12) 「メカトロニクス」と言われる今日の技術革新に対応すべき技能者養成論の中でも、改めて、この実学一体問題が強調されている。企業内教育研究会(座長 奥田建二)〔35〕P.84等を見よ。
- (13) なぜ学科を実技と別に考えるのか、ある作業とその原理がなぜ切り離されるのかは、われわれにとっても重要な議論であるとは思いますが、それは恐らく本格的な哲学的議論とならざるをえないだろう。本報告書の論脈には余るものである。
- (14) 建築の方で「基礎」の前に地形(業)という基礎作業があるが、これは構築のはじめではなく、大地(自然)の加工に属するものと見なされていることは既に述べた。面白いことに「基礎化粧品」でも同じことが言える。メーカーの基礎になるファンデーションという化粧品がある。化粧品店では、化粧水とかスキンケアクリームの種類も販売しているが、これらはファンデーションの前に用いられるにもかかわらず、「基礎化粧品」とは見なされていない。素肌という大地(?)の手入れということである。
- (15) 明治18年改正の『工部大学校学課並諸規則』〔36〕を見ると今日なら「基礎」と言われるところが、すべて「初歩数学」とか「工学初歩」とか言われている。
- (16) ガラス施工業という業種の性格から、積算、見積りも「基礎」から外せない。
- (17) 利休百首のうちのひとつ。
- (18) 例えば、広岡亮蔵〔38〕P.80「スパイラルな系統」を見よ。また、その背景には「心理系統と論理系統」や「主体と環境」の見方がある。
- (19) このような議論の仕方はある基本的な実践的・理論的態度を主張するものでもある。われわれは、「基礎的なものが求められている」という公共向上訓練の事実注目し、そこから目を

そらさなかったというだけのことである。どこか別のところに問題を移したり、もっともらしい解答を探したりせずに向上訓練の経験が突き出してくる困難な事実そのものに取り組む他ないからである。そこからしか新たなものは生まれない。われわれは逃げるわけにはいかない。抱えている問題そのものに意味がある。